

令和6年度第1学期終業式式辞

おはようございます。

今日はまず、皆さんと一緒に「名言」について考えてみたいと思います。世の中には、多くの「名言」があります。皆さんの心に残る「名言」はありますか。そもそも「名言」とは何でしょうか。私にとっての「名言」とは、人生を生き抜くうえで勇気や希望を与えてくれる言葉です。そんな「名言」を手に入れたいといつも思っています。

穎明館に残る「名言」といえば、まずは創立者、堀越克明先生の数々のお言葉が挙げられます。そして、なんとといっても第3代校長、岡本武男先生が広め、定着させた道元禅師の「切に思ふことは必ず遂ぐるなり」を外せません。私も校長HR行脚では、くどいと思われようと、繰り返し伝えています。

6年生、38期生の皆さん、第1志望大学合格を切に思っていますか。切に思っ、努力を重ねて、必ずや成し遂げてください。まずは勝負の夏を強い気持ちで乗り切ることを願っています。

歴代校長の名言としては、第2代校長、久保田宏明先生が折に触れ紹介していた、フランスの小説家・詩人、ルイ・アラゴンの「教えるとはともに希望を語ること。学ぶとは誠実を胸に刻むこと」も思い出されます。学校は希望が語られる場、誠実に教育活動を進める場として、生徒も教師もお互いに尊重しなければならない。希望を語られているか、誠実を胸に刻めているか。第1学期終業式、今日のような節目には、自問自答したいところです。

ところで、私の本棚には、いくつかの名言集があります。人生で初めて手に取った名言集は、忘れもしない、詩人・劇作家の寺山修司作、『ポケットに名言を』でした。高校生の時に出会い、「かっこいいな」と憧れました。その書き出しを紹介します。

言葉を友人に持ちたいと思うことがある。

それは、旅路の途中でじぶんがたった一人だと言うことに気がついたときにである。

たしかに言葉の肩をたたくことはできないし、言葉と握手することもできない。だが、言葉にも言いようのない、旧友のなつかしさがあるものである。

少年時代、私はボクサーになりたいと思っていた。しかし、ジャック・ロンドンの小説を読み、減量の死の苦しみと「食うべきか、勝つべきか」の二者択一を迫られたとき、食うべきだ、と思った。Hungry Young men（腹のへった若者たち）は Angry Young men（怒れる若者たち）にはなれないと知ったのである。

そのかわり私は、詩人になった。そして、言葉で人を殴り倒すことを考えるべきだと思った。詩人にとって、言葉は凶器になることも出来るからである。私は言葉をジャックナイフのようにひらめかせて、人の胸の中をぐさりと一突きするくらいは朝めし前であればならないな、と思った。

だが、同時に言葉は薬でなければならない。さまざまな心の傷手を癒すための薬に。エーリッヒ・ケストナーの「人生処方詩集」ぐらゐの効果はもとより、どんな深い裏切りにあったあとでも、その一言によってなぐさむような言葉。

時には、言葉は思い出にすぎない。だが、ときには言葉は世界全部の重さと釣合うこともあるだろう。そして、そんな言葉こそが「名言」ということになるのである。

穎明館生、若い皆さんには、どう感じられますか。著名な思想家の言葉はもちろん、歌謡曲の歌詞あり、映画の名セリフあり、とにかく型破りな名言集で、高校生当時の私にはずいぶん響いたものでした。心に残る寺山修司自身の言葉を少し紹介します。

一本の樹のなかにも流れている血がある 樹のなかでは 血は立ったまま眠っている

なみだは人間が作るいちばん小さな海です

人間が最後にかかる、一番重い病気は「希望」という病気である

空にかくれようとして飛んでも、鳥は空にみずからを消すことは出来ないのさ

煙草くさき国語教師が言うときに明日という話は最もかなし

若気の至りでしょう。当時の私は、寺山修司のような「凶器としての言葉」も、「薬としての言葉」も手に入れてやる、言葉のハンターになってやると野望を抱いたものです。

さて、この後 HR で成績表をもらう今の皆さんには、どちらかという「薬としての言葉」が必要でしょうか。苦しい時や辛い時に、自分自身を元気づける言葉があるといいですね。私が持っている薬としての言葉は、とても名言とは言えませんが、痛み止めくらいになればと願いつつ、少し処方しておきます。

「失敗経験も大事な経験。次回頑張れ」、「ピンチはチャンス」、「リラックスリラックス」、「大丈夫、なんとかなる」、「明けない夜はない」、「努力は裏切らない」、「まだまだこれから」、……。くよくよしても、必要以上に悩んでも、前には進めません。ピンチを迎えている人も、自分によく効く「薬としての言葉」を持って、上手に乗り切ってください。

ところで、いよいよ明日からは夏休み。皆さんの予定はどうか。多くの人は文化祭の準備やクラブ活動で忙しいことでしょう。穎明館の伝統は文武両道、両立です。宿題を計画的に進め、補習や講習にも積極的に臨んでください。EMK の E、Experience（経験）を意識して、自分ならではの経験を積んでほしいものです。現在、3年生から5年生までの41名の希望した生徒たちは、イギリスのイートンカレッジ、チェルトナムカレッジにて海外研修に参加しています。きっと得難い経験、学びをしていることでしょう。これから夏季講習での校外学習や大学のオープンキャンパス、医療現場体験等々に、参加する人も多いことかと思えます。経験からの学びを大切にしてください。

ただし体験学習、旅行やイベントに行かなくても、読書を通じて、想像上の旅、知の冒険は、いくらでもできます。特に予定のない人は、大いに読書をしてみてください。読書を通じて、自分にとっての名言に出会えることもきっとあるでしょう。そんな願いをこめて、穎明館生の皆さんに、夏休み前のいつもの呼びかけをします。

「本を読もう。新しい出会いを求めて行動しよう。そのときは一冊の本、小さな出会いかもしれない。それでも若い時に読んだ一冊の本や人との出会いは、あとから振り返ると、かけがえのない輝きを放っている場合もある。それは後から気付く。皆さんの人生がそれぞれいい味を出していくためには、本との出会い、人との出会いが必要だ。本を読もう。行動しよう」。

穎明館生の皆さん、元気に有意義な夏を過ごしてください。熱中症、山や水の事故などには、十分に気を付けて、また当たり前前の日常に戻ってきてください。自分ならではの夏を過ごし、よき出会いを経験し、自分ならではの名言を手に入れた皆さんと、2 学期の始業式、この記念館大教室で会えることを楽しみにしています。

以上、令和6年度第1学期終業式式辞といたします。